

氏 名	あお じ はく すい 青 地 伯 水
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 497 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	もうひとつの世界 ——アイヒとヒルデスハイマー

論文調査委員	(主 査) 教 授 西 村 雅 樹	助教授 松 村 朋 彦	教 授 若 島 正
--------	----------------------	-------------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

ギュンター・アイヒ（1907～1972）とヴォルフガング・ヒルデスハイマー（1916～1991）は、戦後のドイツ文学を代表する作家である。アイヒは多くの自然詩をものした抒情詩人として有名であり、また戦後の一時期に重要な娯楽として隆盛を極めたラジオドラマの書き手としても夙に知られていた。ヒルデスハイマーを何より有名にしたのは、晩年の大作、伝記的エッセイ『モーツァルト』（1977）であった。しかしラジオドラマというジャンルを除けば、抒情詩人アイヒと小説・伝記・芝居を活躍の場としたヒルデスハイマーの間に、接点があったことはあまり知られていない。

ヒルデスハイマーの書簡の中には、アイヒの作品に関する彼との遣り取りを伝えるものもあるが、二人の作家アイヒとヒルデスハイマーの間には、創作上の原理にかかわる繋がりもあった。それは二人の世界観といっても、あるいは二人の求めた世界像といってもよいであろう。そこで彼らの求めた「世界像」を、論者は仮に「もうひとつの世界」と呼ぶことにする。

現在の自分が置かれている状況に満足できないとき、あるいは現実の状況において他者または社会との軋轢に耐えかねるとき、人は現状を変更することを望むであろう。そしてこの願望が外部へと向かう者は、現実世界を分析し、現実世界を別の現実世界へと再構築または転換することを目指す。一方現状を変更する願望が内部へと向かう者は、自己の内面の中に「もうひとつの世界」を築き上げようとする。個人の力をもってしては変更不能な現実の補償を、この「もうひとつの世界」に支払わせようとするのである。アイヒとヒルデスハイマーの文学は、現実世界と葛藤する二人が、彼らの内面に築き上げた「もうひとつの世界」を表現しようとする試みであったと捉えることができる。それぞれの創作過程において、時期を異にしていながらも、二人の「もうひとつの世界」は極めて接近し、その後、最終的には離反して異なる相貌を示すのである。

1950年代前半に、戦争犯罪裁判の通訳を経験した後、34歳になってようやく諷刺と揶揄とともに文壇に登場したヒルデスハイマーは、50年代後半に入ると、フランスからドイツ語圏に押し寄せてきた「不条理」の波の波頭に立って進んで行く。当時、大いに議論になったアルベール・カミュの一文「不条理なものは、理性に反して沈黙する世界に問いかける人間を対峙させることから生まれる」に触発されて、ヒルデスハイマーも「象徴的な儀式の場」となるような不条理劇をものするようになる。カミュの世界像は「理性世界」と理性の働きかけが無益である「反理性世界」とから成立しており、「反理性世界」に対して不条理感覚を抱いた人間存在が、自らをとりまく世界に対して、理性的に抵抗を試みる図式であった。ヒルデスハイマーは世界全体を「反理性世界」、すなわち「不条理世界」と捉えており、全体が不条理である世界では、理性ある人間が世界を不条理であると感じたとき、疎外された状況から逃避する以外、現状を打開する方策はない。それゆえヒルデスハイマーの不条理劇の主人公たちは、軋轢を避けた「代用世界」として、「もうひとつの世界」へと逃避するのである。この「もうひとつの世界」が、ヒルデスハイマーの後の内省的作品群で実を結ぶこととなる。

1967年の『フランクフルト詩学講義』においてヒルデスハイマーは、50年代のアイヒ詩学への接近を表明しているが、存在しない「原テキスト」からの「翻訳」による「現実性」の獲得というアイヒの50年代の創作原理が、60年代に成立した彼の作品に関与している。その中心的な作品は『テュンセット』（1965）と『マザンテ』（1973）である。ヨーロッパ文化の過剰性に苦しみ、何もしない自己のあり方に対する罪責感にさいなまれ、戦後も続くナチスの恐怖に直面している語り手であ

る主人公に対して、世界は不条理にも沈黙しており、何ら回答を与えてくれない。それゆえこの主人公は逃避的行動をとり、逃避的空間を「もうひとつの世界」とする。その中で自らの空想世界を編み上げて、起こらなかった現実としての「もうひとつの世界」を創出することを試みるのである。ヒルデスハイマーは、『テュンセット』、『マザンテ』を核とする内省的作品群を、誰もが不条理であると共感できる世界を描いた「不条理散文」と位置づけ、その中でアイヒが56年に主張していた「現実性」の創出にこだわり、フィクションから「現実性」を生み出す可能性を探求したのである。

さらに『フランクフルト詩学講義』でヒルデスハイマーは、20世紀のフィクションにおいて「現実性」が創出されえない原因を、20世紀における市民社会の崩壊に伴う「共通の現実」の喪失に帰している。つまりヒルデスハイマーは現代の世界に創出される「現実性」に限界を認めていたのである。それゆえヒルデスハイマーは20世紀以前の人物であるなら読者の共感を得ることができる「現実性」を創出できると考え、自らの文学的営為の可能性を18世紀後半と19世紀前半との人物の伝記に見出そうとする。それが伝記的エッセイ『モーツァルト』（1977）であり、架空の人物の伝記『マルボー』（1981）であった。

『マルボー』における主人公マルボーは、自然の現象が「自然自身の言語」を所有していると見なす「書物としての自然」という思想を語る。自然はそれ自身の「言語」で人間に語りかけてくる、あるいは人間が気づかないとしても自然の中に「言語」として書かれている。そのような「言語」を読みとることが芸術家の第一の仕事だというのである。ヒルデスハイマーは最晩年に、50年代のアイヒ詩学に現れていたのと同じように、存在しない「原テキスト」からの「翻訳」により「現実性」を達成しようと試みていたのであった。この創作原理に基づいて、現実世界の中に「現実性」として象嵌されたのが、主人公マルボーなのであり、マルボーが旅する19世紀前半のヨーロッパの文化芸術社会は、ヒルデスハイマーにとって最終的に到達した「もうひとつの世界」であった。

ヒルデスハイマーが創作の晩年に抱いていた、「書物としての自然」を「もうひとつの世界」として「翻訳」を試みるという思想は、アイヒが1930年に発表した『詩集』にすでに見られる。当時のアイヒの自然詩に現れる自然への崇敬と信頼との背後には、自然は神の造化であり世界は神のメッセージを伝える書物であるという、『ヨハネによる福音書』を拠り所に彼が抱いていた思想があった。『雨の便り』が出版された55年頃には、アイヒは自身が「造化を受け入れた」（EIV 534）「自然詩人」（EIV 534）であることを認めている。自然を神の造化として受け入れ、自然と合意していたアイヒの思想は、悲惨な捕虜体験をした第二次世界大戦を越えて、詩集『辺地の農場』（1948）所収の「アルニムの墓」や詩集『雨の便り』（1955）所収の「夏の終わり」にも表れ続けるのである。また様々な形で境界を越えてゆく広い意味での「越境」のモチーフがこれらの初期の自然詩の多くに見られる。これらの詩において、神の造化である自然を観察し、自然の中に分け入ることによって、経験的現実の彼岸へ、すなわち「もうひとつの世界」への到達を目指す詩的自我をアイヒは是認していたのである。

アイヒは50年代前半には毎年3編から4編のラジオドラマを発表し、多くの傑作が生まれたので、後に彼のこの時期の創作にはラジオドラマ古典時代の名称が冠せられた。それらの傑作のうちでも『ラツェルティスの年』（1953）の主人公パウ等は、彼岸にある「もうひとつの世界」の絶対的認識を言語で表現しようと試みる。しかし彼らが見出すのはいつも個々の体験にすぎない。絶対的認識は「翻訳」された形でしか人間言語の枠内で表現されることはない。つまり50年代前半のいわゆるラジオドラマ古典時代の作品においては、アイヒは「もうひとつの世界」を擬似的にしか体験できないあり方に妥協を示していた。

ところがアイヒの「もうひとつの世界」は、50年代後半に大きな転機を迎える。ラジオドラマ古典時代も終わりに近づいた1956年、アイヒは人間存在の地上における絶対性に疑義を投げかける『フキタンボポの時代（Ⅰ）』に着手する。そして当時ドイツを襲った不条理の潮流の中で、このラジオドラマを不条理劇『フキタンボポの時代（Ⅱ）』へと改変しながら、アイヒは擬似的にしか体験できない「もうひとつの世界」を拒絶するのである。この拒絶の原因は、1959年に行われたアイヒの「ビュヒナー賞」受賞演説において明らかになる。アイヒのラジオドラマ古典時代の詩学の根幹をなす、「原テキスト」からの「翻訳」という企図は、文学作品において「原テキスト」にもっとも近づいた「現実性」を達成しても不完全な試みにすぎず、絶対的なものである「原テキスト」は決して見出せないという不条理性を伴うものであった。つまり最高の「現実性」が達成されても、それは本質的に「代用回答」なのである。

アイヒは、詩人が社会に対して「文学の言語」による問いかけや批判を試みる以前に、言語を統制するために権力が真なる回答ではない「代用回答」を呈示していると考えている。世界に対する問いかけに答えを得られないで、不条理を感じている人々に、権力は問いかけを放棄して代用回答に甘んじるようにそそのかし、人々を操るのである。したがって詩人の、「原テキスト」からの「翻訳」という図式が生み出す「代用回答」は、権力に利用される危険性を孕んでいる。それゆえアイヒは「原テキスト」からの「翻訳」という図式を放棄する。「原テキスト」は、詩人アイヒの形而上学すなわち「もうひとつの世界」の存在を象徴的に表す概念であったが、ここでこの概念を放棄することは、人間の現実世界の外に「もうひとつの世界」の存在を否認することを意味する重大な転換であった。

アイヒは、1967年に「創造による事物にも合意できない」(EⅣ510)旨を表明している。自然は神の造化であるという思想を、アイヒはすでに捨てるにいたったのである。神の創造を否定した後にアイヒが目指すものは「アナーキーなもの」(EⅣ510)であった。そして『ベルをお鳴らしてください』(1964)の中では、「統制された言語」とアナーキーな思想を文学的に表現した「アナーキズムの言語」との対立をアイヒは描く。『ベルをお鳴らしてください』の中で語られる「アナーキズムの言語」においては、交尾の最中に雄を食い尽くす雌カマキリを例にとり、自然は神の調和的な意思に支配されているのではないことが主張される。これにより神の造った世界を『聖書』と並ぶ第二の書物であると見なす「書物としての世界」というトポスは否定され、世界は「二次文献」(EⅢ722)となる。残虐な自然の恣意によって世界が支配されているのなら、真実在の表現である永遠や神は不在であると、アイヒは見なすのである。この真実在の不在の中でアイヒの用いる「アナーキズムの言語」は、その表現上はそれぞれの言葉そのものが前景に押し出されたかのような訥々とした単語の羅列となる。そしてこの「アナーキズムの言語」世界こそが、「原テキスト」を有する彼岸の世界、人間の現実世界の外に存在する「もうひとつの世界」に代わって、アイヒにとっての「もうひとつの世界」となっていた。

アイヒとヒルデスハイマーの「もうひとつの世界」への取り組みは「現実性」をめぐる、深く交わり合うことになった。しかし「現実性」を彼岸から得ようとする二人の取り組みには時間的なずれがあり、「現実性」をともなった「もうひとつの世界」をこの世にうち立てることをヒルデスハイマーが目指していたとき、「アナーキズムの言語」世界がアイヒの目的地となっていた。このように二人が最終的に到達した「もうひとつの世界」を見れば、ヒルデスハイマーが『マルボー』で達成した「現実性」は妥協的である。「共通の現実」を確認できる19世紀社会に、巧みに架空の人物を象徴して最高の「現実性」を獲得しようとも、やはりその「現実性」はアイヒに言わせれば「代用回答」の域を出ないものであろう。しかしその一方で、アイヒの生み出した「アナーキズムの言語」表現が大いに成功を収めたとは言え、アナーキーな「もうひとつの世界」は社会とのつながりにおいて著しく後退している。「アイヒは自分の楽しみになるものを書くのです」(EⅣ534)という死の前年のアイヒの言葉には、彼の諦念を見出さざるをえないのである。

とはいえ、二人の「もうひとつの世界」をめぐるこれらの企図が、すべて不毛に終わり、彼らの残したものが、水泡に帰したわけではもちろんない。二人はともに講演で、テクノロジーの急速な発達に伴う弊害について慨嘆している。今日、この発展は、彼らの生きていた時代からは想像だにできないものに到達し、さらにその進展はスピードを早めている。ここ10年あまりの間に、交通手段の発展とその低コスト化により、世界は小さなものとなり、遠くの世界を直に目にしたり、世界中の文物を容易に手にしたりできるようになった。世界中で起っていることが商業的価値を有する限り、コンピューターを介して情報化され、次々と映像・音声として目に耳に飛び込んでくる。人類史上、未曾有の刺激の洪水が人類の五感を襲っているのである。

しかし、人間の受容する能力が、著しく進展することなどあり得ない。日々の新たな刺激に反応することに追われる人類は、目に見えるもの、手にするもの、聞こえてきたものといった感覚器官で受容したもの以外を感じようとつとめたり、考察したりするいとまが、ますます奪われていっている。その結果、商業化されたテクノロジーの中で、個々の人間までもがこの使用価値体系の中に組み込まれる。この状況は、権力にとってはまことに都合のよいものであり、個々人は尊厳を奪われ、一人一人の人間は体系の中の歯車と見なされるのである。人間はもう一度、目に見えないもの、五感で感じ取れないものに、思いを馳せて、人間の尊厳を取り戻さなくてはならない。そのためには「もうひとつの世界」の存在が必要なのである。五感で知覚することのできない「もうひとつの世界」に、人間の存在理由が隠されているのだから。それゆえ、「もうひとつの世界」を求める試みには十分な価値が認められると、論者は結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ギュンター・アイヒ（1907～1972）とヴォルフガング・ヒルデスハイマー（1916～1991）という、第二次大戦後のドイツ文学の二人の主要な作家を扱ったものである。互いに傾向が異なるため、一般には関連させて取り上げられることが少ないこの両者の文学の共通性に論者は着目し、それを「もうひとつの世界」への関心として提示している。アイヒは、多くの自然詩によって戦前からすでに知られており、戦後間もない時期にはラジオドラマの書き手としても有名であった。一方ヒルデスハイマーの名は、晩年の大作である伝記的エッセイ『モーツァルト』によって国際的にも広まった。この二人の間には文通も多少はあったという伝記的事実を紹介した後、論者はさらにこの両者の文学の根本的な共通点を探っている。論者はアイヒとヒルデスハイマーの文学は、現実世界との軋轢に悩む二人が、彼らの内面に築き上げた「もうひとつの世界」を表現しようとする試みであったとし、二人の「もうひとつの世界」は一時期きわめて接近しながらも、最終的には離反して異なる相貌を見せるにいたったことを明らかにしている。

ヒルデスハイマーは、当初フランスの不条理劇の影響を受けた作風を示していた。それらの作品では、世界全体が不条理だとされ、理性ある主人公たちは理性では捉ええない世界にあって、軋轢を避けた代用世界である「もうひとつの世界」へと逃避する。1967年の「フランクフルト詩学講義」においてヒルデスハイマーは、1950年代のアイヒ詩学への接近を表明している。存在しない「原テキスト」からの翻訳による現実性の獲得というアイヒの1950年代の創作原理が、1960年代から70年代にかけてのヒルデスハイマーの作品には関与しているということが、『テュンセット』（1965）と『マザンテ』（1973）という二つの作品によって示されている。これらの作品では、主人公は不条理な世界から逃避的空間に逃げ込み、その空間を起こらなかった現実としての「もうひとつの世界」として創出しようとする。論者はここに、フィクションから現実性を生み出す可能性へのヒルデスハイマーの探求を読み取っている。ヒルデスハイマーはその後、市民社会が崩壊したため共通の現実性が得られなくなった20世紀ではなく、18世紀後半から19世紀前半の世界を扱うことによって現実性を創出することを試みた。その成果が、『モーツァルト』（1977）であり、架空の人物の伝記『マルボー』（1981）であった。マルボーが旅する19世紀前半のヨーロッパの文化芸術社会は、ヒルデスハイマーがアイヒの詩学から離れて最終的に到達した「もうひとつの世界」であったと、論者は位置づけている。

一方アイヒは、1930年刊行の『詩集』から1950年代半ばに発行された詩集『雨の便り』に至るまで、自然は神の造化であるとし、自然への崇敬の念を詠う詩を発表していた。自然の中に分け入ることによって、経験的現実の彼岸である「もうひとつの世界」へ到達することを目指す詩的自我を、この時期のアイヒは是認していたのである。1950年代、アイヒはラジオドラマに積極的に取り組み、多くの傑作を生み出した。このジャンルの作品に関しては、50年代前半のものにおいてすでに、彼岸としての「もうひとつの世界」の絶対的認識は言語では表現できないということが問題とされていた。この問題意識は1950年代後半に先鋭化される。この時期に手がけられ改変もされた『フキタンボボの時代』において、アイヒは擬似的にしかな体験できない「もうひとつの世界」を拒絶するにいたる。その理由を彼は1959年に行われた「ビュヒナー賞」受賞演説で明らかにしている。この演説では、「原テキスト」からの翻訳としての文学作品においてそこで達成されうる「現実性」は、絶対的な「原テキスト」に比べればいずれにしても不完全なものにすぎず、得られるのは代用回答にすぎないと指摘されている。アイヒはさらに、この代用回答が権力の側によって利用される危険を説き、そのような恐れのある「原テキスト」の概念を放棄すると告げ、人間の現実世界の外に「もうひとつの世界」を認めることを拒否するにいたった。晩年のアイヒは、神による創造を否定し、真実在としての永遠や神は不在であるとみなしている。真実在の不在の内においてアイヒが用いることになったのは「アナーキズムの言語」であった。ただし論者の見るところでは、この「アナーキズムの言語」は十分な成果を挙げるにはいたらなかった。

本論文では、このように二人の作家の世界について、一時期接近はしたものの最終的には離反することになった過程が、両作家の文学活動に即して詳しく跡づけられている。両作家が異なる傾向を示していたことはすでによく知られていたことであるが、共通するところがあったということはまず論じられることがなかった。この共通点に着目し説得力のある論を展開したということに、本論文の大きな価値が認められる。ヒルデスハイマーに関する章では、叙述がやや平板と感じさせる箇所もあるが、納得のいく論が展開されている。小説『マルボー』に関する記述からは、この作品の魅力が特によく伝わっ

てくる。アイヒに関する章では、劇的な変転をたどったこの作家の精神的営為が見事に捉えられている。ことに、アイヒが回心にも結びつきうる宗教的体験の世界を扱った作品を残しながらも、真実在不在の世界にいたった経緯の説明からは、日常的に宗教上の実践にたずさわる立場にもある論者の真摯な問題意識が感じ取れる。先行研究で述べられている論と、論者の独自の論の区別が一部の箇所ではわかりにくくなっているが、この点については論述の仕方にいっそうの工夫が望まれるところである。ただしこの点は、本論文の学術的価値を大きく損なうほどのものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年8月25日、調査委員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。